広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第63号　2014　67－73

羞恥表出者に対する観察者の評価が観察者の行動に及ぼす影響

福　田　哲　也
（2014年10月２日受理）

The Effects of Observer's Assessment of an Embarrassed Person on Observer's Behavior

Tetsuya Fukuda

Abstract: The purpose of this study was to examine that observer's assessment of an embarrassed person influences observer's behavior. Participants read a scenario in which a friend expressed embarrassment, before responding to items assessing the friend's personality and mental state, as well as their own behavior. Four factors were included in the personality assessment (expressivity, sociability, selfishness, and inactivity), five factors were included in the inference of mental state (puzzlement, incomprehensibility, comicality, pleasure and anger), and four factors were included in the assessment of participant's behavior (helping, avoidance, humor, and other-monitoring). To examine the effects of personality assessment or inference of mental state on observer's behavior, structural equation modelings were conducted. These models revealed that avoidance was predicted by selfishness; that humor was predicted by sociability, selfishness, comicality, and pleasure; and finally, that other-monitoring was predicted by sociability, selfishness, puzzlement, incomprehensibility and anger. These results showed a part of process to produce observer's behavior to the embarrassed person.

Key words: embarrassment, observer's behavior, observer's assessment
キーワード：羞恥，観察者の行動，観察者の評価

問　　題

羞恥は，社会的に受け入れられない自己像や他者に馴染みのない自己像が露呈した時など，自身が苦境に置かれていることを意識した際に生じる感情である。羞恥を感じた際，人は特徴的な顔面表情（Keltner, 1995; 菅原 , 1998）を示し，羞恥を表出する。

羞恥表出は，無表情が示された時とは異なった行動を周囲の人物（＝観察者）から引き出すことが先行研究（Dijk, Koenig, KeteLaar, & de Jong, 2011; Feinberg, Willer, & Keltner, 2012, Study 4, Study 5）から示されてきた。こうした研究では，羞恥表出の有無によって表出者に対する観察者の信頼が異なるのかを検討するために，信頼ゲームなどの資源分配行動が測定指標として用いられてきた。信頼ゲームとは，他者に対する信頼を測定するゲームで，一般例として以下のような手順で行われる。まずゲーム開始時にプレイヤー１には資源が与えられており，プレイヤー１は自分の資源からプレイヤー２に分配する資源量を決定する。プレイヤー１が分配した資源は３倍になったうえで，プレイヤー２の資源となる。その後，プレイヤー２は自分の資源からプレイヤー１に渡す資源量を決定する。先行研究（Dijk et al., 2011; Feinberg et al., 2012, Study 4, Study 5）においては，観察者にプレイヤー１の役割が，羞恥表出者あるいは無表情を示した

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：森永康子（主任指導教員），中條和光，宮谷真人

人物にはプレイヤー２の役割が与えられていた。そして，プレイヤー１である観察者は，上記の手続きの説明を受けたうえで，プレイヤー２である羞恥表出者あるいは無表情の人物に渡す資源量を決定した。その際，プレイヤー２が示す羞恥表出には，主に羞恥表情が使われており，視線を外す，微笑む，わずかに頭を下げる，顔に手を触れるといった典型的な羞恥表情（Keltner, 1995）が用いられてきた。その結果，観察者が渡す資源量が，表出者の羞恥表出の有無によって異なっており，羞恥表出は無表情が示された時と異なる行動を観察者から引き起こすことが示された。

しかしながら，観察者の行動に対する羞恥表出の効果は先行研究間で一貫していない。例えば，Feinberg et al.（2012, Study 4, Study 5）では，観察者は無表情を示した人物よりも羞恥表情を示した人物により多くの資源を渡すことが示された。一方で，Dijk et al.（2011）では，観察者は，羞恥表情を示した人物よりも無表情の人物により多くの資源を渡すことが示された。このように観察者の行動に対する羞恥表出の効果は一貫しておらず，研究によってその方向性は異なっている。

こうした研究間の結果の不一致には，観察者による表出者への評価が影響していると考えられる。先述の Feinberg et al.（2012, Study 4）では，羞恥表出者は無表情の人物よりも向社会性が高いと観察者から評価されることが示された。さらに，この研究では，羞恥表出者に対する観察者の向社会性評価が高まった結果，資源分配行動が促進されることが示された。この結果は，羞恥表出は観察者からのポジティブな評価を引き出し，その評価が観察者の行動に影響すると言い換えることができる。Feinberg et al.（2012, Study 4, Study 5）とは異なり，無表情の人物により資源分配がなされた Dijk et al.（2011）では，羞恥表出者は無表情の人物よりもポジティブさや信頼性が低いと観察者から評価されていた。Dijk et al.（2011）で，羞恥表出者に対する資源分配行動が抑制されたのは，観察者からのパーソナリティ評価がネガティブであったことに起因すると考えることができるだろう。

ここまで，表出者に対する観察者の評価が観察者の行動にいずれかの方向性で影響することを述べてきた。これまで紹介してきた先行研究で扱われていた評価は，表出者のパーソナリティという時間的に持続したものへの評価であった。しかしながら，羞恥の表出は，表出者の考えていることや感じていることなどより一時的な，表出者の状態に対する評価も観察者から引き出す。Dijk et al.（2011）では，刺激として用いた羞恥表情や無表情から読み取れる感情について観察者に評価を求めた。その結果，観察者は羞恥表情から羞恥だけでなく楽しさという感情についても読み取れると評価していた。Dijk et al.（2011）において羞恥表出者に対する資源分配行動が抑制されたという結果には，観察者からのパーソナリティ評価に加え，こうした表出者の状態に対する評価（＝心的状態の推測）が影響していた可能性が考えられる。

これまで紹介してきた研究をまとめると，羞恥の表出は，観察者からのパーソナリティ評価や心的状態の推測を引き出し，こうした評価は観察者の行動にいずれかの方向性で影響を与えると考えることができる。

しかし先行研究は，羞恥表出者に対する観察者の評価と行動の関係について，限られた行動や評価しか検討対象にしていない。さらに，先行研究で扱われてきた観察者の行動は，信頼ゲームにおける資源分配行動というものであった。信頼ゲームで測定されるような他者への信頼にもとづく行動は，日常場面において多様な形で表れると考えられる。こうした観察者の行動は，表出者が示した羞恥表情の種類やおかれた状況，さらにはそれらの組み合わせの影響を受けて変化するだろう。そして，実際に観察者がとった行動が異なれば表出者への影響も変化することが予想される。従って，日常場面で羞恥表出により引き出される多様な行動がどういった評価の影響をうけて促進あるいは抑制されるのかという点を明らかにすることが必要であろう。日常場面での観察者の行動を対象とする場合，それに影響を与える評価もまた日常場面で生じる多様な評価を用いる必要があると考えられる。こうした観察者による評価もまた，表出者の示す表情やおかれた状況，その組み合わせの影響を受ける可能性が考えられる。

こうした理由から，本研究では日常場面における羞恥表出者に対する観察者の行動や評価に注目する。それらを整理した研究として，福田・樋口・蔵永（2014）が挙げられる。この研究では，まず様々な羞恥場面を呈示し，羞恥表出者に対する観察者の行動や評価に関して自由記述による収集を行った。その後，収集した自由記述の分類およびカテゴリ化を行い，得られたカテゴリから観察者のとる行動や表出者に対するパーソナリティ評価，心的状態の推測に関する項目を作成した。次に，公恥状況と呼ばれる羞恥場面を呈示し，その場面において，作成した各項目への反応パターンを調査した。そして，因子分析を行い，羞恥表出者に対する観察者の行動，パーソナリティ評価，心的状態の推測の整理を行った。その結果，羞恥表出者に対する観察者の行動は援助，放置，ユーモア化，観察という4種類に整理された。同様に，パーソナリティ評価は

表出性，社交性，利己性，消極性という4種類に，心的状態の推測は困惑，不可解，可笑しさ，満足，怒りという5種類に整理された。この研究の2度目の調査において行動や評価の整理を行う際に用いられた公恥状況は，表出者の劣位性が露呈する状況と定義されており（樋口 , 2000, 2009），報告頻度の多い典型的な羞恥状況だと指摘されている（樋口 , 2009）。この点を踏まえ福田他（2014）は，整理された行動やパーソナリティ評価，心的状態の推測は，観察者が行う典型的な行動や評価だと述べている。そのため，羞恥表出者に対する観察者の行動や評価を扱う際，福田他（2014）において得られた行動および評価の類型を使用することに一定の妥当性があると考えられる。

そこで，本研究では，福田他（2014）で整理された羞恥表出者に対する観察者の行動と評価を用いて，観察者による羞恥表出者へのパーソナリティ評価と心的状態の推測それぞれが観察者の行動に及ぼす影響を検討する。

本研究では，上記のように羞恥表出者に対する観察者の評価が行動に及ぼす影響を検討することが目的である。しかしながら，すでに述べたように観察者の行動や評価は，表出者が示す羞恥表情の種類や表出者がおかれた状況，そしてその組み合わせからも影響を受けることが考えられる。そこで，本研究では，表出者の表情や状況を以下のように設定し，表出者の表情やおかれた状況，その組み合わせからの影響を考慮した上で，評価が行動に及ぼす影響を検討する[1)]。

まず，本研究では，これまで紹介してきた先行研究（Dijk et al. 2011; Feinberg et al. 2012, Study 4, Study 5）と同様に，顔面表情を羞恥表出として用いる。表出者が示す顔面表情として，福田他（2014）と同様の特徴をもった４つの表情を用いる。この４つの表情は，菅原（1994, 1998）が示した典型的なハジ表情，テレ表情，ハジ＋テレ表情の特徴を持つ３つの羞恥表情に福田他（2014）が作成した無表情を加えたものである。菅原（1994, 1998）は，羞恥感情はハジとテレという２つの感覚から構成され，羞恥表情にもその２つの感覚に基づいた３種類の表情があることを指摘している。冒頭で述べた羞恥の定義のうち，社会的に受け入れられない自己像が露呈した際に生じる感覚がハジであり，他者にとって馴染みのない自己像が露呈した際に生じる感覚がテレである（菅原 , 1992, 1998）。菅原（1994, 1998）は，眉，目，口，赤面の有無といった顔面表情を構成するパーツに多様性を持たせて組み合わせ，180種類の表情を作成した。次に，作成した表情をランダムに６種類１組にし，各表情につき10名，計300名を対象に各表情から読み取れるハジとテレの程度について，調査を行った。そして，得られた結果からハジとテレの２次元上に180種類の表情をプロットした。その結果，各象限に含まれる表情の構成パーツにはそれぞれ独特な特徴があることを見出した。そうした各象限ごとの特徴を含む表情が典型的なハジ表情，テレ表情，ハジ＋テレ表情である。さらに，この３つの表情がハジやテレの感覚を表しているのかについては，福田他（2014）の研究において検討が行われた。福田他（2014）は典型的な羞恥状況である公恥状況において，無表情を含んだ４つの表情から読み取れるハジとテレの程度について測定を行った。その結果，ハジの感覚の得点は，ハジ表情がテレ表情やハジ＋テレ表情，無表情よりも高いことを，テレの感覚の得点は，テレ表情とハジ＋テレ表情がハジ表情や無表情よりも高いことを示した。こうした結果から，３つの羞恥表情は典型的な羞恥状況において羞恥を適切に表しているといえる。

また，菅原（1998）は，羞恥は呈示した自己像が他者から否定的あるいは肯定的に評価された時に生じることを指摘している。そこで，本研究では，表出者が否定的な評価あるいは肯定的な評価をされる２つの状況を用いることとする。

方　法

対象者と手続き　大学生330名（男性87名，女性240名，性別不明３名；平均年齢20.20歳）を対象に質問紙調査を行った。調査方法として集合調査法または宿題調査法を用いた。調査対象者にはシナリオを呈示し，その後，質問項目への回答を求めた。

呈示場面　調査対象者に呈示したシナリオは，顔や名前は知っているがあまり話したことのない同性の友人（表出者）に否定的な評価あるいは肯定的な評価が与えられるという内容であった。具体的なシナリオの内容は，顔や名前は知っているがあまり話したことのない同性の友人が授業で発表を行い，授業終了後にまだ学生が大勢残っている教室で先生からコメントを受けてある表情を示す，というものであった。友人が受けるコメントによって状況の操作を行った。表出者が否定的な評価を与えられる状況（＝否定状況）では，表出者は先生から“君の発表は全然わからなかった。あれではダメだよ”というコメントを受けた。表出者が肯定的な評価を与えられる状況（＝肯定状況）では，表出者は先生から“君の発表はわかりやすくて，とてもよかったよ”というコメントを受けた。否定的あるいは肯定的な評価を与えられた後の表出者の行動に関しては，福田他（2014）が指摘しているように様々な

Table 1
本研究で用いた項目

	因子名	項目
パーソナリティ評価	表出性	恥ずかしがり屋だ，照れ屋だ，すぐ顔に出る人だ
	社交性	社交的な人だ，明るい人だ，楽観的な人だ
	利己性	わがままな人だ，周りのことを考えない人だ，自分勝手な人だ
	消極性	大人しい人だ，真面目な人だ，内気な人だ
心的状態の推測	困惑	戸惑っている，困っている，気まずさを感じている
	不可解	その友人の考えがわからない，その友人の気持ちが読めない，その友人の思っていることがよくわからない
	可笑しさ	笑いをとろうとしている，周りを笑わそうとしている，自身に起こったことが面白いことだと思っている
	満足	嬉しく思っている，誇らしく思っている，喜んでいる
	怒り	イライラしている，怒っている，ムカついている
観察者の行動	援助	友人にかけよる，友人をなぐさめる，友人の気を紛らわせる
	放置	自分だけその場から離れる，友人から遠ざかる，友人を放置してその場を立ち去る
	ユーモア化	友人をからかう，友人を茶化す，笑う
	観察	周りの人の顔を見る，周りの人の様子を見る，周囲の反応を見る

Figure 1.　本研究で用いた４つの表情

ものが考えられる。従って，シナリオ上では評価が与えられた後の表出者の行動について限定しなかった。

表出者が先生からのコメントを受けた後に示す表情は，福田他（2014）と同様の特徴をもった４種類の表情（Figure 1）のいずれかであった。各調査対象者に呈示されるシナリオは，２つの状況と４つの表情を組み合わせた8種類のうち，いずれかであった。

なお，シナリオ上の表出者はすべて“顔や名前は知っているがあまり話したことのない同性の友人”という心理的距離が中程度の人物であった。これは，福田他（2014）が述べているように，心理的距離が近い“友人”などが表出者の場合，パーソナリティ評価が表情以外の要因によって決まることが考えられるためである。一方，心理的距離が遠い“知らない人”が表出者の場合，観察者の行動そのものが生起しない可能性が考えられるためである。

質問項目　調査対象者には，表出者に対するパーソナリティ評価，心的状態の推測および回答者自身（＝観察者）の行動に関する項目について回答を求めた。

測定項目には福田他（2014）で得られたパーソナリティ評価（表出性，社交性，利己性，消極性），心的状態の推測（困惑，不可解，可笑しさ，満足，怒り），観察者の行動（援助，放置，ユーモア化，観察）の各因子において，負荷量の高い３項目を用いた。具体的な測定項目は Table 1に示した。各項目に対する評定語は，“1. あてはまらない”―“5. あてはまる”であった。

結　　果

欠損値の処理及び分析対象者数　得られたデータにおいて，各因子を構成する３項目のうち１項目のみ欠損だった場合，残りの２項目に対する同一回答者の回答の平均値を代入した。１つの因子において２項目以上欠損がみられた回答者は分析から除外した。また，過去10年間で最も長く住んだ国を日本以外と回答した人物も分析から除外した。こうした処理を行った結果，分析対象者数は312名（男性82名，女性230名；平均年齢20.16歳）となった。分析対象者の内訳は，否定状況への回答者が162名（ハジ表情40名，テレ表情43名，ハジ＋テレ表情40名，無表情39名），肯定状況への回答者が150名（ハジ表情41名，テレ表情38名，ハジ＋テレ表情34名，無表情37名）であった。

パーソナリティ評価が観察者の行動に及ぼす影響　観察者の行動12項目に対する回答者の回答を因子ごとに加算平均し，援助得点（α = .71），放置得点（α = .84），ユーモア化得点（α = .74），観察得点（α = .93）を算出した（Table ２）。同様に，パーソナリティ評価12項目に対する回答者の回答を因子ごとに加算平均し，表出性得点（α = .75），社交性得点（α = .81），利己性得点（α = .76），消極性得点（α = .67）を算出した（Table ３）。

Table ２
状況表情別観察者の行動の平均値（*SD*）

状況	表情	援助	放置	ユーモア化	観察
否定	ハジ	2.81 (1.08)	2.78 (1.08)	1.24 (0.40)	3.49 (1.18)
	テレ	3.18 (1.02)	2.50 (1.06)	1.85 (0.88)	3.78 (1.10)
	ハジ+テレ	3.08 (1.08)	2.62 (1.08)	2.49 (1.08)	3.57 (1.09)
	無表情	3.09 (0.92)	2.37 (1.03)	1.54 (0.89)	3.91 (0.97)
肯定	ハジ	2.32 (0.85)	2.27 (1.15)	2.20 (0.93)	3.15 (1.31)
	テレ	1.92 (0.65)	2.61 (1.03)	2.32 (0.90)	3.17 (1.24)
	ハジ+テレ	1.78 (0.54)	2.60 (1.19)	2.48 (1.00)	3.25 (1.29)
	無表情	2.21 (0.90)	2.76 (1.14)	2.07 (0.98)	3.54 (1.36)

Table 3
状況表情別パーソナリティ評価の平均値（*SD*）

状況	表情	表出性	社交性	利己性	消極性
否定	ハジ	3.31 (0.93)	1.95 (0.66)	1.43 (0.46)	3.48 (0.71)
	テレ	3.76 (0.77)	2.65 (0.78)	1.46 (0.57)	3.29 (0.70)
	ハジ+テレ	3.05 (0.85)	3.87 (0.71)	1.83 (0.62)	2.01 (0.71)
	無表情	2.21 (0.77)	1.76 (0.61)	1.80 (0.76)	2.92 (0.75)
肯定	ハジ	4.34 (0.62)	2.02 (0.52)	1.38 (0.55)	3.93 (0.52)
	テレ	4.22 (0.64)	2.48 (0.67)	1.34 (0.51)	3.74 (0.61)
	ハジ+テレ	4.33 (0.49)	3.20 (0.85)	1.75 (0.79)	2.91 (0.81)
	無表情	2.90 (0.91)	1.60 (0.55)	2.19 (0.96)	3.79 (0.89)

Table 4
パーソナリティ評価が観察者の行動に及ぼす影響

	援助	放置	ユーモア化	観察
表出性	—	—	—	—
社交性	—	—	.342 ***	-.112 *
利己性	—	.154 **	.143 **	.159 **
消極性	—	—	—	—

注）値は標準偏回帰係数
*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$
横線は，除外したパスを示す

Table 5
状況表情別心的状態の推測の平均値（*SD*）

状況	表情	困惑	不可解	可笑しさ	満足	怒り
否定	ハジ	4.23 (0.47)	2.18 (0.98)	1.10 (0.30)	1.12 (0.30)	2.19 (0.94)
	テレ	3.74 (0.75)	3.04 (1.17)	1.75 (0.88)	1.72 (0.85)	2.15 (1.04)
	ハジ+テレ	3.30 (0.97)	2.94 (1.10)	3.01 (1.08)	1.53 (0.66)	1.86 (0.92)
	無表情	3.48 (0.95)	3.09 (1.35)	1.30 (0.42)	1.15 (0.37)	3.25 (0.95)
肯定	ハジ	3.76 (0.85)	2.30 (1.08)	1.22 (0.33)	3.36 (0.82)	1.28 (0.40)
	テレ	2.59 (0.87)	1.68 (0.76)	1.46 (0.57)	4.39 (0.50)	1.11 (0.26)
	ハジ+テレ	2.65 (0.95)	1.67 (0.77)	1.87 (0.82)	4.37 (0.52)	1.08 (0.18)
	無表情	3.58 (0.75)	3.91 (1.08)	1.32 (0.48)	2.34 (1.09)	2.05 (1.17)

Table 6
心的状態の推測が観察者の行動に及ぼす影響

	援助	放置	ユーモア化	観察
困惑	—	—	—	.117 *
不可解	—	—	—	.127 *
可笑しさ	—	—	.447 ***	—
満足	—	—	.354 ***	—
怒り	—	—	—	.185 **

注）値は標準偏回帰係数
*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$
横線は，除外したパスを示す

パーソナリティ評価の各得点を説明変数，観察者の行動の各得点を目的変数とした共分散構造分析を実施した。その際，状況と表情それぞれのダミー変数および状況と表情の交互作用項を作成し，観察者の行動およびパーソナリティ評価に対する統制変数として用いた。

分析の結果，モデルの適合度が許容範囲外の値であった（GFI = .959, CFI = .933, AGFI = .183, RMSEA= .223）。そこで，モデル内のパスのうち，有意もしくは有意傾向でないパスを除外するという手続きを繰り返し，モデルの修正を行った。最終的に得られたモデルの適合度は許容範囲内の値であった（GFI = .946, CFI = .934, AGFI = .859, RMSEA = .080）。最終モデルにおけるパーソナリティ評価から観察者の行動への標準偏回帰係数は Table 4 に示した。Table 4 をみてみると，放置は利己性の評価が高いほど促進されることが，またユーモア化は社交性と利己性の評価が高いほど促進されることがわかる。同様に，観察に関しては，利己性の評価が高いほど，また社交性の評価が低いほど促進されることがわかる。一方，援助に有意な影響を及ぼすパーソナリティ評価は見られなかった。

心的状態の推測が観察者の行動に及ぼす影響　心的状態の推測15項目に対する回答者の回答を因子ごとに加算平均し，困惑得点（α = .76），不可解得点（α = .94），可笑しさ得点（α = .82），満足得点（α = .94），怒り得点（α = .90）を算出した（Table 5）。

心的状態の推測の各得点を説明変数，観察者の行動の各得点を目的変数とした共分散構造分析を行った。パーソナリティ評価を説明変数とした分析と同様に，状況と表情それぞれのダミー変数およびそれらの交互作用項を作成し，観察者の行動および心的状態の推測に対する統制変数として用いた。

分析の結果，モデルの適合度が許容範囲外の値であった（GFI = .960, CFI = .947, AGFI = .092, RMSEA = .225）ため，パーソナリティ評価の時と同様に，有意もしくは有意傾向のパス以外を除外するという手続きを繰り返し，モデルの修正を行った。最終的なモデルの適合度は許容範囲内の値であった（GFI = .942, CFI = .942, AGFI = .857, RMSEA = .078）。最終モデルにおける心的状態の推測から観察者の行動への標準偏回帰係数は Table 6 に示した。Table 6 を見てみると，ユーモア化は可笑しさや満足といった推測が行われるほど促進されることが，観察は困惑や不可解，怒りといった推測が行われるほど促進されることがわかる。一方，援助や放置に有意な影響を示す心的状態の推測は見られなかった。

考　察

本研究では，日常場面で行われる羞恥表出者に対する観察者の行動や評価を用いて，羞恥表出者に対する観察者のパーソナリティ評価および心的状態の推測それぞれが観察者の行動に及ぼす影響を検討した。

その結果，援助を除いた３つの行動，すなわち，放置，ユーモア化，観察に影響を及ぼすパーソナリティ評価または心的状態の推測が明らかとなった。

この３つの行動には共通して利己性が正の影響を及

ぼしていた。特に，放置に関しては利己性のみが有意な正の影響を示していることから利己的な人物だと評価されると放置が促進されると言えよう。また，本研究の結果からは，利己性に加え他の評価が行われると，ユーモア化や観察が促進されるということができる。以下からは，利己性に加え，どのような評価がなされるとユーモア化や観察が促進されるのかについて考察を行う。

ユーモア化に関する結果を見てみると，利己性以外には，パーソナリティ評価における社交性，心的状態の推測における可笑しさや満足といった評価が正の影響を与えていた。これらの構成項目は，社交性は明るい人，可笑しさは笑いをとろうとしている，満足は喜んでいる，などであった。こうした評価が行われる表出者は，明るい人，ポジティブな状態の人だと観察者から評価されていると言えるだろう。そのため，表出者は利己的という評価だけでなく，明るい人あるいはポジティブな状態だと評価されるとユーモア化がより行われやすくなるといえる。

次に観察に関する結果を見てみると，利己性以外に心的状態の推測における困惑と不可解，怒りが正の影響を，パーソナリティ評価における社交性が負の影響を与えていた。観察者は，主に表出者が困っている，あるいは怒っている場合，そもそも何を考えているのかが分からない場合に観察を行っていると言うことができる。こういった場合，観察者は自身がどのように振舞ってよいのかわからないため，周囲の人の振る舞いを手掛かりにしようとし，観察を行ったのだと考えられる。また，社交性が観察に負の影響を示していたことから，ユーモア化の結果と異なり，観察者は表出者が明るくない人だと評価すればするほど観察を行うことも示された。

これらをまとめると，観察者は，表出者がただ利己的な人物だと評価した際には放置を行うが，利己的に加えて明るい人物あるいはポジティブな状態だと評価すればユーモア化を，自分がどのようにふるまえばよいのかわからないと考えた場合あるいは表出者が明るくない人物だと評価した場合には観察を行う，と結論づけることができるだろう。

ここまで論じてきたことから，観察者による表出者への評価により観察者の行動が変化するということができる。本研究で得られたこの知見は，先行研究である Feinberg et al.（2012, Study4, Study5）と Dijk et al.（2011）における資源分配行動に対する羞恥表出の効果の方向性の不一致を説明する際に役立つだろう。本研究では，日常場面で行われる観察者の行動に焦点を当てたため，先行研究で用いられた信頼ゲームを実施していない。そのため，先行研究（Dijk et al., 2011; Feinberg et al., 2012, Study4, Study5）と本研究で用いた行動の直接的な対応づけを行うことはできない。しかし，観察者による評価が行動に影響を与えるという本研究で得られた知見を踏まえると，Feinberg et al.（2012, Study4, Study5）と Dijk et al.（2011）における資源分配行動に対する羞恥表出の効果の方向性の不一致は，観察者からの評価によって説明できる可能性が高いといえるだろう。

次に，本研究で用いたどの評価も有意な影響を示さなかった援助に関して考察を行う。特に，心的状態の推測における困惑が援助に有意な影響を及ぼさなかった点は特徴的だと言えよう。羞恥は苦境場面で生じる感情である。そのため，羞恥状況において表出者は，観察者から困っていると評価されやすいといえる。そして，表出者が困っていると評価されれば，観察者からは援助が行われると予想される。しかし，本研究において困惑は援助に有意な影響を及ぼさなかった。困惑が援助に有意な影響を及ぼさなかった点については，傍観者効果（Latané, & Darley, 1970 竹村・杉崎訳 1977）によって説明できるかもしれない。本研究で用いた場面は，表出者と観察者以外の第三者がいる場面であった。そのため，観察者はだれかが表出者を助けるかもしれない，と考えた可能性がある。この可能性は，困惑が観察に有意な正の影響を示していたことからも支持できるだろう。こうした第三者の存在という理由から，観察者は，表出者が困っていると評価しても援助を行わなかったのかもしれない。

最後に今後の課題について記述する。最大の課題は，やはり援助が何に基づいて生じるのかを明らかにすることであろう。

援助の生起に関する変数として観察者の動機が挙げられる。援助の生起に動機が関わることについては，羞恥を社会的相互作用が停滞した際に生じる混乱とみなす Goffman（1967 浅野訳 2002）の考え方から導くことができる。Goffman（1967 浅野訳 2002）の考えは，社会的相互作用が停滞し，表出者が混乱すると羞恥が生じるというものであった。そのため，表出者だけでなく，その場にいる周囲の人物も混乱し，羞恥を感じる。この考えを踏まえ，菅原（1998）は，他者が羞恥を感じると自身も混乱するので観察者には表出者に援助的な行動をとる理由がある，と述べている。この指摘から，観察者の援助的な行動は，自分が混乱を避けるためという利己的な動機に基づいて生じるといえるだろう。

さらに，観察者の動機には，自分のためという利己的な動機以外も存在し，行動に影響することが想定さ

れる。Goffman（1967 浅野訳 2002）の考えに従うと，観察者は羞恥を取り除くために，停滞している社会的相互作用そのものや大元の原因である表出者に対してアプローチすることが考えられる。そのため，観察者には社会的相互作用を元に戻すためといった動機や表出者のためといった動機が生じることが予測される。これらを踏まえると，観察者の動機は，観察者自身のため，表出者のため，社会的相互作用を元に戻すためといった3種類に整理することができよう。この 3種類の動機が観察者の行動に影響を及ぼすのか，またその方向性がどのようなものなのかを実証的に検討することが必要であろう。

また，本研究の結果，羞恥の表出状況において表出者と観察者以外の第三者がいたことにより観察者からの援助が抑制された可能性が示された。そのため，第三者の有無といった状況の違いが，観察者による評価と行動の関連に及ぼす影響を調べることも必要であろう。

【注】

1）本研究の目的は，観察者による表出者への評価が行動に及ぼす影響を検討することである。そのため，本論文では，状況や表情，それらの組み合わせが観察者の行動およびパーソナリティ評価，心的状態の推測に及ぼす影響については報告しないものとする。

【引用文献】

Dijk, C., Koenig, B., Ketelaar, T., & de Jong, P, J. (2011). Saved by the blush: Being trusted despite defecting. *Emotion*, **11**, 313-319.

Feinberg, M., Willer, R., & Keltner, D. (2012). Flustered and faithful: Embarrassment as a signal of prosociality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **102**, 81-97.

福田哲也・樋口匡貴・蔵永 瞳 (2014). 羞恥表出者に対する観察者の評価および行動―表出者の表情による違い― 感情心理学研究 , **21**, 80-90.

Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face behaviour*. New York: Anchor Books, Doubleday and Company Inc.（浅野敏夫（訳）2002 儀礼としての相互行為〈新訳版〉対面行動の社会学 法政大学出版局）

樋口匡貴 (2000). 恥の構造に関する研究 社会心理学研究 , **16**, 103-113.

樋口匡貴 (2009). 恥―その多様な感情の発生から対処まで　有光興記・菊池章夫 (編) 自己意識的感情の心理学 北大路書房 pp.126-141.

Keltner, D. (1995). Signs of appeasement: Evidence for the distinct displays of embarrassment, amusement, and shame. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 441-454.

Latané, B., & Darley, J. M. (1970). *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?* New York: New York Appleton-Century-Crofts.（竹村研一・杉崎和子（訳）1977 冷淡な傍観者 思いやりの社会心理学 ブレーン出版）

菅原健介 (1992). 対人不安の類型に関する研究 社会心理学研究 , **7**, 19-28.

菅原健介 (1994). 羞恥表情の構造に関する研究 日本心理学会第58回大会発表論文集 , 103.

菅原健介 (1998). 人はなぜ恥ずかしがるのか―羞恥と自己イメージの社会心理学　サイエンス社